ピエール・ボナールのアルカディアをめぐるまなざしと植物――1910年代の二つの「夏」作品に着目して

五十嵐実果子（無所属）

フランスの画家ピエール・ボナール(Pierre Bonnard,1867-1947)は、画業を通じて緑豊かな自然と人物を描いている。これらの表象はギー・コジュヴァルが述べているように、人間と自然とが完全に融合したアルカディアとして評されることも多い。

ボナール研究は、ジャン・クレールの論考「視神経の冒険」(1984) 以来「知覚」が一つのキーワードとなっている。特に、ボナールの絵画制作において知覚プロセスが意識されているとする議論は、ボナールを革新的な画家として位置づけることに大きな役割を果たした。一方、ボナールがナビ派時代から意識的に取り組んできた「装飾」という領域はその犠牲となった。本発表では、アルカディアが描かれた《夏、ダンス》(1912)と《夏》(1917)において、これまで中心的な分析対象とされることのなかった植物モティーフに焦点を当て、「装飾」の概念を手掛かりとしてその位置づけを捉え直すことを試みたい。

まず、ボナールの「知覚」にまつわる先行研究を整理したうえで、その核心として捉えられてきた「突然部屋に入ったときに目に飛び込んでくるもの」というボナール自身による言葉を紐解きたい。

その上で、スイスのコレクターであるアーサー、ヘディ・ハーンローザ夫妻に向けて描いた《夏》(1917)を対象に、当時の批評や、観者としての知覚といった受容の側面での分析を行う。中心に描かれた裸婦のモティーフは神話性・アルカディア性を示す一方で、左右に大きく描かれた樹木は装飾としての機能を有していると考えられる。感覚的な読み取りを可能にするこの樹々の装飾性に着目し、ボナールをめぐった装飾にまつわる批評、ひいてはそのゆらぎといったものを紐解くことで、この装飾の概念がボナールを論じるうえで切り離すことのできない重要な概念であったことを明らかにする。

続いて、ロシアのコレクター、イヴァン・モロゾフに買い取られた《夏、ダンス》(1912)を対象とし、画家の制作原理に着目した考察を行う。《夏、ダンス》(1912)は、完成作に向けた素描が数点残されている。人物と植物の素描をそれぞれ完成作と比較することによって、植物モティーフに対する探求の独自性を明らかにする。この結果は、ボナールの「主な主題は表面であり、それは独自の色と法則を持ち、オブジェクトの上に存在している」というメモ書きと共鳴するものであると考えられる。独自の色と法則とは、ジョルジュ・ロックらによって装飾を意味することが指摘されており、それが植物の領域において発揮されているとするのが本発表の見解である。

本発表においてボナール作品の人物と植物を見つめることによって、従来指摘されてきたモティーフの構成に潜む知覚のヒエラルキーを浮かび上がらせると同時に、ボナールの絵画実践における植物モティーフの位置づけの独自性を明らかにする。